WASON
HQ
1104
J74+

Sept. 1893
no. 352

明治廿六年九月二日發兌

女學雜誌

第三百五十二號

女學雜誌社

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

本號目錄

社説

日本の花嫁〇相馬家疑獄と廢妾論〇女子教育者の會合〇岐阜縣下の洪水

雜錄

田舍雜話（松茶村。若旦那。小説家。新聞雜誌。村長一對。殿樣。風狂病）

風潭老人

日本昔時の女權論（山下石翁）

兒籃

犬つくをどり（若松しづ子）

小説

春風裡（トオストイ作、不知庵主人譯）

史傳

坂本龍馬氏の未亡人を訪ふ（在峽。山本節）

理學

燐火（二）けい子

家政

家内重寶錄（あん衣もち。臭のついた玉子。飼鳥のはげ。フランチル洗濯法）

女報

前號目錄

社説

歸省中の女學生

女子夏季學校目前に在り

隨感

議論事業の基本は家庭に在り◎家内不平病を診察す◎可憐孃と士の氣節◎夏日朝夕の祈禱

雜錄

玉堂女訓（第一）

從順の道

理學

燐火（けい子）

論説

歐米女子高等教育の近況（津田梅子）

兒籃

犬つくをどり（しづ子）

家政

香水と石鹼

書架

貴女之心得〇近松門左が女子の性格〇ゼヲヂ、エワオト

女報

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第三百五十二號

明治二十六年 九月二日發兌

社説

魚龍深入無レ憂レ釣、
鳥解二高飛一豈觸レ羅。

○日本の花嫁

田村直臣氏が著作「日本の花嫁」は、近日物議の種となれり。こは、米國にて出版せる英文の書籍にて、日本に於ける、婚姻、及び室家の狀態を演説せるものなり。われら、其二三章を通讀して、之を畢ゆるの元氣なく、半途にて止めたり。其の記載せる事實の當を得ざるはもとよりなれど、更らに異議すべきは、其文章の氣韻、調子の極めて輕薄なることにありとす。

凡そ、父母の國の曲事は、成べく之を隱さんとするを、人の至情となすといへど、或時は、止むことを得ず之を訐き、公けに痛議することあり。たゞ其事止むを得ざるに發するが故に、議論辯説の調、自から痛楚殷々たるものあり。聞く人、之が爲めに動かされ、其情を察し、其思ひを痛ましとして、其常識を破るの罪を問はざる也。曩に、志士馬場辰猪が、米國に於て日本を痛論せる言説など、多少此趣きありと云ふべし。然るに、此度び、田村氏が著作に至りては、毫も此邊の風味を存せず。壯んに自國の短所を白狀し、巧みに其醜をかざりて、外國人の一粲に投ぜんとするの樣姿、紙面に歷々たるが故に、心ある人は、慨然として之に義憤せざるを得ず。但し本邦の志士が、之に慨憤するは、尙ほ可なり。惟ふに、米國無風雅の讀者頗ぶる多きの間にも、豈に眞正の貴婦人紳士多からずとせんや。彼等は、該書中記載の事實に顰蹙するに先だち、著者が床しからぬ心得に澁面して、日本傳道師の中には、斯るレベレントもあるものにやと承知し、現然、其事實を捉て、我國の風俗を推諒することあらんには、遺憾此上なきことと云ふべし。何れにせよ、苦々しき事にぞある。

（二）

○相馬家疑獄と廢妾論

相馬家疑獄の結局如何があらん、方今日々の新聞紙は、其の報道にて、半餘を埋め、世上の評判も亦た此外に談緒なきに似たり。毒殺の事、ありしや、何如に。之れ甚はだ疑はしき問題にして、無論、容易に信を措くべきにあらず。然りと雖ども、故誠胤子爵に對する接遇の鄭重ならざりしこと、時ありては、慘酷とも申すべきほどに至りしの事實は、もはや掩ひ消すべからず。此一事は、すでに輿論の判決を了して、明々白々の宣告、夙に終れるの觀あり。

扨て、右の如き接遇の慘酷は、何如なる元因より來りしかと云ふに、必竟これ大名の家に在ふれたる「お妾さわぎ」の外なきもの〻如し。誠胤子の實母と、順胤子の生母とは、ともに故充胤子爵に侍べりたる寵妾にして、二子はこれ同父異腹の兄弟たり。則はち、紛議の元因は、此邊に存して、古來のお家騷動には珍らしからぬものと覺ゆ。

左れば、今回の疑獄の大根本を穿鑿すれば、病元は、一夫一婦の制度明らかならずして、置妾邪淫の毒深く骨髓に徹したる故に在る者の如し。前年、時事翁は、華族社會に於ける、置妾の効德を巧みに說法せられたることあり。何事にも多少の利益と、其事の生存すべき幾分の必要とはなかる可らず、と雖ども、置妾の毒は、其効に及ばず、百弊之より生じて、家內の騷ぎ、永く鎭靜すべくもあらず。平民少數者の家族にてすら、其害夥たゞしきに、華族大名など申して、家扶家令幾たりかを置き、侍女僕婢の數おびたゞしく、出入臣下の面々多數なる家柄にては、妻妾の反目、及び妾と妾との競爭より、甚しき分派徒黨を引起し、餘波の打つところ、出入町人にまで及び、一家は宛がら秦楚六國の修羅塲とならんとす。此に及んでは、弊害あげて數ふべきにあらず。

此度の騷動によりて、此弊害の恐ろしきこと、今更の如く感ぜらる〻なり。華族の人々は殊に警醒すべし。一般置妾の人も亦大ひに戰慄すべし。世上有志の矯風家は、大ひに努力する所ろなかるべからざる也。

○女子敎育者の會合

女子夏季學校は、一昨三十一日より開校せり。來る、七日、

恙がなく其閉校の式を擧げたるの翌日より、基督教主義女子教育者の懇話會催ふされんとす。席上懇話熟議を遂げらる可き問題のうち、既に確定したる分は、左の如し、

女生の體操に付きて◎方今女子高等專門教育の必要何如及び其方法◎校内傳道の良法何如◎家政科實修の良法如何◎方今女子教育非運の原因及び振興の方法に付て◎女禮につきて◎基督教主義各女學校連合の方法に付て◎

斯くして八日、九日の二日間は、同念有志の教育者、相會して、互ひに經驗を吐露し、疑議を質し、更に前途將來の事を相約して、以て同主義女子教育の進路に稗益を與へんとを欲せらるゝよし也。

今や、官に在ては文部大臣井上毅君、切りに女子就學者の增加せんとに掛念盡力せられ、民間第一の教育團體に長たる辻新次君も、亦た、女子教育の爲めに、しば〳〵氣焰を吐かる。而して、保守反動の過激は、もはや汎ねく人の嫌惡する所となりて、正に乾坤一變の機到來せり。此時に當りて、基督教主義女子教育者の間に於ても、亦た、此般の計畫あり、英氣いよ〳〵發露せんとするの兆を見て、尤とも慶すべきとと思はる。

○岐阜縣下の洪水

岐阜縣下震災の餘毒未だ全く治せず、戶々慘運の物語り、尙ほ耳あたらしきの折柄、天また大雨を下し、河川大に溢れ、近世稀れなる洪水、木曾川、揖斐川、長良川のほとりに起りぬ。田圃あれ、人家流れ、加之、山くづれ、道壞れて、產を失ひ、生命を損せしもの、引もきらず。あゝ、此縣下の天災を蒙むると、何ぞ、如此く、數々にして、亦た如此く常に慘憺たるや。憶ふに、當年、震災の變、頗ぶる烈甚にして、天の警戒きわめて嚴そかなりしに、人民之に目さむるとをせず其後の形勢一層醜汚なりしかば、心あるもの、皆な戰々競々として、恐懼の念止みがたかりしに、今や乍ち此事あり。

嗚呼、岐阜縣下の同胞、それ、何の日にか、大警醒を爲す。而して、天災、地變に於ける、道德上の意義、それ、何人によりてか、大ひに傳へらるゝことを爲す。吾黨憮然として、長歎し、亦慨然として、大ひに奮ふ所ろなきに非ず。警告す當年の震地傳道隊員、及び、之に同情を寄せられたるの諸君、未だ、公等が責任、既に了れりとすべからざる也。

雜錄

一間欲擬邵生席、
三徑休疑陶氏園。

田舎雜話

風潭老人

松茶村

此處は都を十里ばかり離れたる村里なり、松みどりに茶園遠くつらなりたれば人呼んで松茶村といふ、おのれ人眞似に暑を避けんとて友に頼みて農家の一間を借り受け、朝に飯をかしぎ夕に茶を煮て消閑の一策となしぬ、アメリカの風流人ワシントン、アービングなどいふ人此處に來らば、向ふの寮坊主の顔を見ても、昨日の裏の葬式を見ても中々に哀れの心も起るべけれど、幽靜閑雅も內幕を知りたる老人には面白ろからず、唯相知れる誰れ彼れの訪ひ來ておかしき話に高笑ひするが妙なり、朝に閼伽を汲み夕に花をつみし兼好が庵には味噌の通醬油の通もありしなるべく、心なき身にも哀れを知り來たる圓位の法師も武藏野の萩にはねられぬ、世は餘りめかさぬが尊きなり。

若旦那

此村の若旦那は面白ろい人なり、當時流行の殖産事業も熱心にて、添田の財政通論は虎の卷、ミルの代議政體をもそらんじたり、こりた事ありて政治選擧には一切手を出さず、月に一度東京へ行き年に二度旅行するなり。

村で一等の健筆家にて事あれば頼みに來る、書齋にある篁村のむら竹集と巢林子の戲曲數種とは、東京に書生をせし折文學を好みし名殘りとかいへり、老人これまで巢林子を知らず、一度此書齋に入りてより忽まち近松熱にうかされ、終日出でざることさへありけり、唯讀むは面白ろからず、さりとてかたるわけにもゆかず、終に一種の朗讀法さへ工夫致しぬ。

廿世紀の始めに佛國巴里に博覽會あり、御同道如何、歸りに以太利行脚も妙ですといへば、賛成々々、君は旅費があるかといはる、老人何如だかと申したれば、宜ろしい僕が引き受

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

けよう、六七年非常にかせぐ、こゝらの義侠は浪六の小說にしたき程の主人公なり。

小說家

一日友にさそはれて、此處を三里ばかり離れたるとある町にゆきて某といふ人を訪ひぬ、此人田舍には珍らしき風流人にて歌俳諧などもやり、且つ小說が大好きにて都の名ある大家にも交際ある由なり、文庫には代々の歌集、源氏湖月抄などを收め、新刊の書も多く紅葉露伴のもの多きを占めたり、尤も御自分にても小說は書かるゝ由にて二三の稿を示されぬ、細君は中々の美人にて都にもあまり見ぬ方なり、應接もてなし極めて親切にて老人もうれしく思はれぬ。

この人の言葉に、世に風流ほど薄倖のものはない、どうも小說家は小供はもてぬものと見える、先には武内桂舟子、岡田虛心子、次にはわが方、それより尾崎紅葉子、落合直文子、今はまた石橋思案外史が其愛兒をさきだてました、それをきゝては唯今浮びました一句

　　こほろぎのなく音わびしや硯箱

新聞雜誌

多く入りこむは小新聞にて中央、都、改進などなり、隨分競爭もある樣子なり、大新聞は報知、毎日などなり、これはこの邊に改進黨の多き故なり、心ある人は日本新聞をとる由、雜誌は史海、國民之友などなり、今度の國民の附錄は如何かと聞きたれば、何だかだめだ、面白ろくない、然かし廣告をよく集めたれば、これが中々妙だといへり。

妙なものなり、中にはしがらみ双紙など讀む人ありて、審美論は如何ですかと問はれたり、老人も閉口して何だかわかりませんと答へたり。

村長一對

こゝに某といふ老人舊村長なるがおはしけり、この人非常の信心家にて村の稻荷にこりかたまり、小は一身一家の事より大は一鄕一村の事まで皆神樣の御告を受けて處理し給ふ、ある夕の事なり役場よりの歸るさに、とある森影にかゝりたる處、何者ともなく暗き方より、骨瘠せ色失せたるが白衣をきてこなたに來る、村長殿身もふるふばかりに、暫しは足も進まざりしが、やがて影は幻の如くに消え去りぬ、これは往にし年こゝに近き荒川といふに漂流したる乞食を厚つく葬りや

りたるが、御禮にとて現れたるなりとの御告げありたる由なり、人と歩み給ふてふと森影くさむらなどに坐する事もしばしばにて、又一間も飛びて田畠の中へ入り給ふ事もありけり、これは皆突然神の御告げある時の由、今春身の前世は加藤左衛門椽重成かるかや道心なりとの御告あり、かゝれば村長などいふ職に在りては信心も心のまゝならず、神へ對して相すまぬとて改選の折を幸ひ勇退遊ばされぬ。

この人近き頃大隈秀麿、加藤政之助氏に從ふて北海道へ旅立ち給へり、御年も若からず御費も容易ならざるべきに、八重の汐路をはる〴〵と、如何なる御心にやと口々に言ひあへり、始めこの行をすゝめたる人、餘りの御威勢にて勇み立ち給ふをあやぶみ、門出の祝の宴に侍りて、遠路の御旅路くれぐれも御注意あれと申しければ、先生意氣揚然、コップを擧げて反身になり、ナニ今度は御告げが御告げだから。

これはまた南部といひて、此處を離るゝ遠からぬ村の長殿なり、大の東京通にてやんごとなき方々と交際あるが御自滿なり、やれ此間鄕純造の處へ行つた、澁澤がたづねて來た、己れの親類は東京の此樣いふものだ、辨當さげて役塲に臨まれ長官の椅子によりて金側の時計を机上にひらき、事務とては一つも處理なされず、東京のあすこの料理は如何だ、こゝの菓子は如何だ、とおかしき品定めのみにて、三時となればツト御歸館なり、書記小遣など澁茶に駄菓子のつきはひにも一向かゝはり給はず、御自分は都より取り寄せ給ひたる藤村風月堂の尊き品々紙につゝみて御持參あり、懷よりとり出し給ふて色々の御講釋、下々に分け給はるのかと思へば、やがて御自分の口に入れ、ひとり舌打ちなし給ふ。

前のとこれと、好一對の村長樣といふ、これでも內務省へ出頭すれば有志家とかいふものなり。

殿樣

この南部の村長殿に一人の若君おはしけり、幼より東京に出で給ふて當世風の敎育も受けられ、紳士の交際も心得給ふ、嫁御寮にわたらせらるゝは、都の或る紳商の令孃にて、御輿入の節は中山道を馬車にて下向まし〳〵ぬ、それより後は家風とみに變りて賤しき村男など近寄せ給はず、さては人ごとに殿樣〳〵と呼び參らせぬ、殿樣手いみじう書き給ひ又た書畫古物など殊の外愛でさせ給ふ、某といふ道具屋常に御傍にか

しづく。

近き頃この殿わが知れる人を訪ひ給ふ、鄙の事とて何の風情もなく澁茶に浮世話しなど申上ぐれば、秘藏の書畫やある、出せ〱と懇々の御所望なれば、よき悪しき、古き新しき、品々とりまぜて澤山もあらぬ内より御覽に入るれば、これは眞のもの、これは僞のものと一々御鑑定あらせ給ふ、大雅堂の扇面殊の外御意にかなふて、これはよい、これは本物ぢや己れが鑑定證をやらう、追て大雅堂の傳もとり調らべて遣はそう、得々として御歸りに相成りたり、やがて二三日をへて殿より郵書參りぬ、おしひらきて見れば、大雅堂扇面一個右眞物也、如何なる書よりぬきがきし給ひしか畫家の傳も詳しう認められ、某月某日何某と記して印をさへ添へられぬ、尊きものにあらずやと我友昨日の茶話しに我に示して大笑に笑ひけり。

風狂病

村の某といふ男、さる御祝儀の席に末坐におとされたるがくやしく〱、これも學のない爲めなれば、今年七十の老母に嫁と小供を捨てゝ紀の高野へ登り、有晴上人となりすまして歸りまするとこれより氣が變になり、仕事もろく〱手につかず、有金さらつて二日歸らず三日歸らず。

よく聞けばこれは眞の狂人の由、さて此處に狂人ならぬ狂人こそおはしけれ、村の豪家に先頃より宿れる一人の書生何でも變だと人々いひあへり、一人である時放吟高笑、さりとてしめりにしめりて机の上の花に對して涙を落す事さへ見受けぬ、人の前にて口一つきかず、朝は日のさすまでも起きず夜は多くねむらずといふ、昨日友の一人來りて耶蘇信者だらうといふ、何戀の病だらうと老人がいへば、其家の女中來りて彼の人に聞きましたれば、己れは風狂病といふ病人だとか申しましたと。

此人夕の散歩にオヘリアの歌小意氣にうたひ、前の御寺の墓塲にたゝずむ、小供等これを聞き傳へて、うろ覺えのハウ、シユード、アイは今日此頃の村の流行歌となりける。

○日本昔時の女權論

山下石翁

一條禪閣兼良が、小夜のねざめに言へらく、日本國は、和國とて、女のおさめ侍るべき國なり、天照太神も、女躰にてわたらせ玉ふうへ、神功皇后と申し侍りしは、八幡大菩薩の御母にて、わたらせ玉ひしぞかし、新羅百濟を攻めなびかして、此豊葦原の國をおこし給ひき、近くは、鎌倉の右大將の北の方、尼二位殿は、二代將軍の母にて、大將の後は、ひとへに、鎌倉を管領せられ、いみじく成敗ありしかば、承久の亂れの時も此二位殿の仰せとてこそ、義時もろ〳〵の大名に、下知せられしが、されば、女とて、あなづり申すべきにあらず、むかしは、女躰のみかどの、かしこくわたらせ玉ふのみぞ多く侍りしが、今も誠にかしこからん人のあらんは、世をまつりごち玉ふべきなり、と。我國昔時すでに、此類の説なきにあらず。女權説の由來を尋ぬるもの、ひとり西國にのみ負ふ所ろあらんとするは、不學の故なり。

兒藍

犬つくをどり（二）

しづ子

頃は正月、まだ松のうちのとでした。此家の緣類で、ひとりもの丶某といふが遊びかた〳〵此家へ參り升た。丈の高い強さうな紳士で、どこか、氣短かな處が容貌に現はれて居り升た。此人が停車場から大きいカバンを下げて、參り升と、「八」は例の通り、門まで出迎へに參り升て、ワン〳〵、ワン、ケヤンとお定りの挨拶をして居り升た。此紳士は犬が大好で、家には行儀よく、中〳〵賴母しい飼犬を持つて居り升た故、「八」が來る度に泥棒扱ひをするのを不快に思ひ升た。併し人の飼犬をむやみに蹴飛されもしませんから、手を出して懇ろに聲をかけて見升た。「八」も此紳士の手から膳部の殘を幾度も頂戴したとのあるもの故、流石に見ず知らずの人と同し樣にそしらぬ顏も出來ぬと見へて、一寸手をなめて、愛相をして

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

見升た。然るに紳士が家にはいらうとして、歩みかけ升や否、踵について、ワン、ケヤン、ケヤンワンと吼へたけつて居り升た。此時紳士の癇癪がどこからか、ムラ〳〵と湧き出して、何とも治め兼ねたものと見へ、手早にステツキで「八」を撲ふとすると、逃げ足の早い「八」はピヨイト跳びのき升た。己れ逃して堪るものかと、思ひ直す暇もなく、紳士は手に持つたカバンを投げつけ升た。中には破れものがあつたかないか、兎に角、カバンの角が丁度「八」の横腹に中り升て、臺處の方へケヤン〳〵叫びながら走つて行升た。「八」は此後決して再び此紳士には吼へませんかつた。

此紳士は「八」の處業を嫌がると共に、犬口一家の互に吼へ合ふ樣な擧動を一際快からず思ひ升た。必竟、犬口夫婦は仲がわるいから、始終遣り込めやつてるとは思わず、實際の處夫婦の交誼が人並に變つた處はないので、口八釜敷のは、一種面白からぬ僻であるといふことは、チヤント承知して居升た。自分の居合せた時言葉合戰が烈しくなつて、居たゝまれぬ程と思ふ頃などには、此紳士、極くひようきんで、眞面目な顔つきになつて、妙に首を縮め、

僕の樣な獨身ものは、何だか締りがわるくつて、たまりませんから、マア睦言はおやめになすつて下さい。

といひ升と、流石の犬口夫婦も笑はずに居られませんかつた。

ある日、此紳士は一番年上の女の兒に話しをしかけて、學科のとに付て、何か深切に尋ねて居り升た。芳子はしとやかにうけ答へをして居ると、そこへ弟がやつて來て、姉のいふとに一々反對し姉をまた遣りこめて見たりして、己が才力をひけらかし升と、姉も中〳〵默つては居ず、双方たけり立て、紳士との談話はそつち除けになり升た。紳士は

それではあなた、音樂が好かね？

尋ね升と、姉は、

エー、大變好なんです、

といつてる處へ、弟が口を出して、

ヤア姉さん、好なんかへ？それじやアなぜいつでも音樂の稽古ッていふと、泣んだへ？

いつでも泣てるもんですか？

泣てるとも、

いつでもなんといふとは有りアしないよ、どふかして行つ

まる時には泣くこともあつたけれど、

ヤア、それじや　姉さんの音樂はどれも〳〵行づまり計りだ、拔路途は一ッもないんだネ、

と冷やかしかゝると、紳士は少しく癪にこたへたものと、見へて、どふも八釜しくしやべるじやないか、さう自分の口の制裁が出來んければ、君、舌をつかまへて居ると好に、

といふと、弟は態とペロリ舌を出して、麗〳〵と兩手につかまへ、妙な顏つきをして紳士の前へ突立升た。舌を引き込ます暇のない中に、紳士はポカァリ拳固を食らわせ升と、舌の先こそ、好い迷惑な、上齒に當てられて淚の出るほど痛み升た。紳士は此時、

君たちの樣なのは、口計りでは理屈の分かる樣にはなるまい。

といひ升た。この通り手ひどく子供を詰責いたし升たが、さりとて、子供等は强ち、此紳士を嫌らふといふとは有ませんかつた。紳士の中條の尤なとは拳固の一ッや二ッ喰れられても、よく分つて居り升、殊に此紳士は何かと子供の爲になつた人ですから、内心此紳士を尊敬せぬものは一人も有ませんかつた。

此客が到着した晩方の事でした、此家に秘藏した蓋物の破われたのは、其器を安全な處へ置たか、置ぬかといふとに付ては、犬口夫婦も眞劍にやりあひ升た。それが濟むと、下女が呼ばれて、旦那さま　、奥樣がお揃ろひの處で、さん〳〵に叱り懲らされ升た。下女は臺處へ下つた處で、口惜し紛れに、側に寐て居た「八」をいやといふほど蹴り升た。キヤンといつて跳び除く拍子に、庭の掃除をして居る車夫へピヨイト突き當る。突き當られて、惶てる機みに、草の中のバッタを狙つて居る猫の足を踏み升と、猫どの脊を尺取虫なりにして梅の木へかけ登るという、大變なお家騷動を避けて、彼の紳士はひとり、坐敷に新聞を開らひて居り升た。スルト間もなく先の姉弟がはいつて來まして二人はまたいつもの通り、樂のしみそうにクンックを交じへて居り升した。紳士は新聞の上ゑから、暫らく、チット二人の顏を見て居りましたが、やがて、

太郎さん、一寸こゝへ來てくれ玉へ、

太郎は何氣なく、近づき升た。

太郎さん君の舌を出して御覽、

何しに、おぢさん醫者じやないでせう？

マア、いふ通りにし玉へといつたら。

さういふなり、氣早な紳士の手は、モヂ〳〵して居るらしいのに心づいて、太郎は杪時も猶豫せず、ピヨイト舌を出して見せ升と、紳士はつく〴〵それを眺めて、大嘆息をいたし升た。さうして、哀れ氣な聲になつて、

果してだ、それだからこそ、僕が………芳子さんも來て、出してお見せなさい。

紳士は芳子の舌を見ると、一層氣の毒さうな顏つきをし升た。二人の子供は何やら薄氣味わるくなり、

何？何んです？

と一齊に、自分等の舌の先をつかまへて、濒りに見て居り升た。然るに紳士は返事もせず、徐々座敷を出にかゝり升て、口のうちで、氣の毒な、か哀さうに、」といふ樣なとを獨語の樣に、つゞけていつて居る樣子でした。丁度座敷を跨ぐ拍子に後ろを振りかへり升て、

君たちは、舌の先が少し尖つて來たに氣がつかんかね？

………

子供たちは今はます〳〵氣味わるくなり、

いゝへ、ほんとになぜでせう？

といふ樣な問を我知らず起し升た。

紳士はまぢめに、

若し、いよ〳〵さうと氣のつく樣だつたら、僕に知らせ玉へ

と意味あり氣にいつて、あちらへいつてしまひ升た。明くる朝になると、子供たちが又紳士を責めかけ升た。

おぢさん、僕たちの舌がどうしたんだか、話して下さいな。

エー、どふしたんだろう？

君たち、またモウ今朝もやりかけて居たね、舌合戰を、エー？その通りだからね、どふも、

アレ、おぢさん、それはよくつて、何でもないんですよ、二人とも知つてゝしてるんですよ。だけど、昨晩、舌のよ仰つたのが氣になるんですからさ、

紳士は眞面目な切口上になつて

僕はどふも危ぶんでるんだ、ヒヨツトしたら、君だちが……

二人は眼を丸くして、

どふしたんです？

君たちは犬つくをどりにとられて行きやァしないかと思ふんだよ。

何！犬つくをどり！とられるつて何？そんな話し聞いたことないチー、姉さん、

紳士はこれから、犬つくおどりに付て、いかほど二人に質問されても、一言も口を開らきませんかつた。此翌日はお年玉に鴨を貰つたとて、雑煮好の犬口一家は晩餐にこれを料つて、紳士の馳走かた〳〵大振舞をいたし升た。子供たちもゆるされて夜ふけまで食べたり飲んだり、歌つたりの大愉快をいたし升た。紳士は火鉢を抱きながら、喧しい中にたゞ一人、家内の様子を眺めて居り升と、犬口夫婦始め、下女、下男に至るまで、此日を晴と例の舌戰をやつて居り升た。夫人は「晴れの衣裳に染をつけられた」と呟く、主人は「汚れる着物は着ぬが好い」といふ。いつか主人が「うちではボロを着て、拵らへる着物はみんな餘處の人に見せるのか」と叱つたからと返報がへしをする。子供たちは遊ぶにわたしをそつちのけにしたとか、しないとかといつてやり合ふ。菓子の貰ひ様が不公平だと泣言をいふ。婢僕たちは唐紙越しにこゝの景况をかい間見て、誰の頭が邪魔だとか、誰に足を踏まれたとかいつて爭そつて居升た。

子供たちが床についたのはかれこれ、十二時頃でも有升たか、太郎も枕について、間もなく眠り升たが、フト眼を醒すと、何だか部屋の中を足拍子とつて跳つて居るものがある。始めてあたりが、何だか妙に青赤く光つて居て、見定めがつきませんでしたが、よく〳〵瞳を据へると、居たとも、居たとも、奇妙不思議な毛だものがトント田舍の盆おどりみた様に丸く環になつてトン〳〵、ドシ〳〵跳つて居り升た。顔は狼に似て犬の如く、耳から耳へかけて細く長く、赤い舌を出した鹽梅は畫に書いた龍の様でもあり升たが、モウ一ツ不思議なよには、あと足でたつて盆おどりをやつて居る此毛ものゝ手が丸で龍か鷹の爪の様で、キヤン〳〵、ワン〳〵吼ながら跳る中に、合手の頭の長い毛を一抓みむしつては下へ捨てる鹽梅が何ともいへないほど不氣味でした。自分は我知らず床に起直つて見て居ると直ぐ側に聲があつて、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

愉快じやないか？

といひ升た。見れば、跳る中間の毛ものが一寸、小息みして、側へ來て居たのでした。太郎は

愉快ッていふのですか、僕なんか、あんなヿはいやですな、

甘い〱、さういかなけりやいけないんだ。今度僕のはいる番になると、君もつれてつて上ませう。君なんか丁度好んです。もつて來いつていふんだ。知つてませう、これがそら、犬つくをどりつていふんです、犬つくの何ものたるは、君なにかに說明する必要なしさ。ネイ勿論のヿだ。ホレ、みんなやつてまさあ、聞いて丶御覽なさい、あんな風に負ずにやるんです、跳りながら人に何か怒鳴られる、其時の返事にヤ、忘れても穩當なヿをいつちやァいけませんよ、あの通り毛をむしられ升からネ。愉快極まる遊びさネ、

どふも、あなた丶ちには愉快かも知れないが、僕たちの樣な人間にヤ、チト不釣合かとおもふネ、

いふ中にはや、自分の身は其盆をどり見た樣な環の中へ引づり込まれてしまひ升た。流石の太郎も戰慄いたし升た。

ヤア、大變だ！

盆をどり中間のものが、

そんなこつちやァだめだネ、なんだ隨分はしつこくやつた僻に、まだ舌が裂るまでじやないネ、それでも。サア、やり玉へ〱、シッカリやらんと丸坊主だよ、

これから太郎は一處になつて我知らず跳たりとんだり、我ながら不思議と思ふほど身が輕くなつて、犬つくをどりをセッセとやり升た。

おもしろひネー！

と口のさけた合手が吼へる樣に怒鳴り升た。太郎は隙さず

何がおもしろひ？

と食らはせ升た。

君の嗜好が違つて居るからだ？

どこかちがつてるんだ？

それじやァ、高慢で片意地だからだ、チット髮をとかして上よふか？

それは眞平だ、

とうつかりいふや否、横鬢の處の髮を一ッつかみ、メッ〱

とやられ升た。太郎は叫び升たが、もうあとの祭りで、合手は嬉しげに、とんだり、はねたりして先へ行き升た。

ヤア、君の毛は奇麗に縮れてるネ、今やられたからだらう

と外の一疋がいひ升た。太郎は泣聲になつて、

餘計なお世話だい、

イヤ、これが樂しみなんです。

太郎も大分なれて來て、平氣になり、

獨りで樂しんでるが好ヤ、人の世話やかずに

君も共にし度んじやないか、

といつて、より添われ何だか不氣味になつて、又うつかり、

アヽ御免だ！

すると又々あちらの横びんを一とむしりやられ升た。

これからまだ／＼先が長いとでしたが、此犬つくおどりの中間にはいつてる間、今まで姉か他の人とやり合つた言葉合戰がよく／＼嫌で／＼、つく／＼眼の覺める樣にさとり升た。

いつの間にか眼をあいて見ると、犬つくおどりは雜煮のたべ過が醸した不快の夢と分り升たが、自分は子供ながら矢つてこれよりつまらぬ言葉合戰は全く止め、姉も合手がなくなつて此頃は大分優しい物いひになつたさうです。兩親はどうですか、まだ犬つくおどりに加つたとがないから、子供の手本位で長年の癖は治らないかも知れません。(完)

小說

春風裡

其六(中)

トオストイ作
不知庵主人譯

良人はトント家内の事に係はなかつたが、冬ですらも毎朝屹と田園を見廻るが常で、いつも自分よりも早く起き、一緒に朝餐の席に就く時は子供の樣に嬉しがツてハシヤいでゐた

タシヤナ、セショーノウナは朝の中はいつでも其部屋に引籠ツて、わざ／＼使をよこしては自分夫婦の機嫌を伺ふが常例で、其使がノベツにダラ／＼と口上を述べる時には堪らなく可笑しくなツて、吹出すのを押へ樣ともがく事は何度だか

知れぬ。其口上は即ち斯うである、『タシヤナ、セショーノウナが申しまするは昨日御馬車で御運動になりまして御氣分は如何でござります。手前は腹が痛みました上に近所の犬が、吠立てますので臥せられませんかッた。夫から今日のパンは如何でございます、ニカラッシエに申しつけましたんでございますが、思の外上出來の樣に存じます。其代りに少しコゲ過ぎまして……』

朝餐が濟んで「ヂンナー」までは夫婦互に別れて、此間が即ち互ひの業務を取る時で、自分は針仕事から家事賄に忙がしく、セルギイ、ミハイエロウキチは讀書考索に餘念なく、頓て四時頃になると、一緒に表座敷に集り、義母までも隱居所から客を連れて來る、此客は大抵皺共茶なお婆ァさんで、一人や二人はいつも居合せてゐた。

其時セルギイは片手を母君に捧げ、自分と諸共に左右の手を取りて食堂に行き、頗る眞摯に片苦しく究屈に談話をする間に時々自分夫婦のタワイなき洒落に莊重なる座席の威嚴を毀損した。

食事後、タシヤナ、セショーノウナは大きな肱掛椅子に凭れて烟草を燻らすか、さもなければ新刊書籍の紙を切るが恒例で、自分夫婦は高聲で讀書するか、或は音樂を奏するが第一の慰で、自分がセルギイの好きな「ソナタ」を彈べる時は、いつでも薄暗い部屋の隅に立ッてゐて、縱令自分は充分に其顏を見る事が出來ぬにしても、慥に餘念なく聞惚れてゐる氣色が知れて、自分が彈べ了ッてから其傍に行くと、嬉しさうな色が眼に見えて、兩頬には紅が挿して滿足な躰は包みおほせぬ躰であッた。

夜の茶は自分が受持で、毎夕家内の面々を集め自分が主人となッて茶の管待をする例だが、馴れぬ中は中々大役で、自分の樣な若輩では、一々茶を酌で是はマリヤ、ミニッチナ是はイワン、イワーノウ井チと配ッて、さて其加減を聞て召仕の者に命して砂糖を各々に分けるのは中々骨の折た事である。『是は結構だ、中々上手だ』と良人に云はれる度に益々ドギマギした。

茶が濟んでから母君は部屋に引取られ、一同は仝時に退散し自分夫婦も寐間に引籠る規則である。けれども自分夫婦は夜更までも睦まじく語られて容易に眠らなかッた。勿論しめ

やかに母君に聞えぬ様に注意したは、早寐といふ事が母君の非常にお好きな言葉であつたからで。

時に依ると隨分飢だるくなつて迚も辛抱がしきれなくなると、密と人知れぬ様に階子を下りて、食堂の戸棚から晩餐の殘肴を寐間まで運ぶ事もある。

何の事はない、自分夫婦は此家の寄留人となッた様な心地がして、何から何までが面倒臭く、五月蠅くて、面白くもない家財諸式や奉公人までも邪魔でならなかッた。しかし其度毎に此五月蠅さを紛らさんとして自分夫婦の愛情は等閑ならず深くなるは不思議なほどで、例へば家僕のドミイトリイ、シデーロフが非常な喫烟家で、いつでも夕方にこッそり隱れて良人の書齋に忍び込んで烟草を吸ふ時に中々困る。良人のセルギイは流石に此無禮を叱りもせず寛大に見過してゐたがさて邪魔になッてならぬ。如何にかして見附けられまいと抜足さし足で爪尖立ッて、ドミイトリイの容子を見ながら自分の方へ摺り寄て、一寸でも此姿が見えなくなるや否 忽ち自分の頸に抱き付き、自分の唇に「キッス」して、何故コンナに可愛からうと云ふ。勿論是は間がな障がなで、コンな事をするのが云ふに云はれぬ樂である。

隨分時たまはセルギイの仕打が餘りシツコク五月蠅い様な心地のする事もあるが、流石に自分も嫌な譯でもなく、矢張嬉しくて樂しくて面白くてならなかッたから、唯セルギイを餘りに見供染みて意地のない様に考へたゞけで、却て又此見供じみた意地のない方が自分の身に取りて嬉しい様であッた『お前はナ、己がコンナ事を云ふのを五月蠅く思ふだらうナア。しかし斯ういふ樂もホンの一時だ。モウ直きに寤めてしまう。つまらんよ、いつかは泡の様になるからナ』と或時セルギイは云ッた事がある。

しかし何の事だか更に此事は分らなかッたが、兎にかくセルギイの言葉だから自分は之を信用した。しかし此樂がホンの一時であるといふ仔細が少しも自分には呑込めぬ。

閉レ戸只容ニ風入一レ幕、
開レ窓唯許ニ月臨一ロ軒。

史傳

坂本龍馬氏の未亡人を訪ふ

在峽　山本節

坂本龍馬氏は海南奇傑の士なり彼れは維新の風雲に際會し土州の郷士より身を起し光芒腰間の秋水と共に北斗を衝く底の氣魄を鼓して天下の名士と翻江攪海の手腕を揮ひ旋天斡地の偉業を畫せんとせしも中途蹉跎遂に其俠骨を頑迷なる幕士の凶刄に委して靈山苔冷かなる邊に永眠の客となれり而して彼れが生きたる紀念として今日までも遺せるは其の聘定の夫人千葉サナ女史なりとすサナ女史今回其の知己たりし我峽自由黨の老將亡小田切謙明翁の墓に展し且つ其の家政整理を幇助せんが爲め單身險を蹈んで入峽せられぬアヽ人情輕薄紙より薄く塵より輕きの時女史其苔下の知己に酬ひんため單身百里を遠しとせずして來る思ふに世人は女史が今回入峽せられたる所以を聞くと共に又女史が如何なる人なるやを推知するに於て餘りあらんなり況んや女史は龍馬氏の未亡人誰れか一度其の風采に接して其人の果して如何なる人なるやを確かむることを思はざるべき予も亦其の來るを聞きて其人を見るに切なりし乃ち峽中日報社の泡沫庵主近藤氏と相拉して女史の旅寓市下横澤町なる小田切家を訪ふ時は八月廿一日午前九時秋雨蕭々如糸。

小田切家に至りて刺を通ずれば女中出で來りて應接せり應接終れば烟草盆は先づ予等の膝前に進めり烟管を把りて一吹する間もなく一人の婦人出で來りて來意を尋ねられたり婦人は小田切未亡人なりし因て來意を告げ導かれて奥坐敷に至る緞氈のべられ坐布團敷かれ烟草盆安置せられたる其室中床の間を斜に背にして坐せるは即ち坂本龍馬氏の未亡人千葉サナ女史なり女史予等を慇懃席に延きて先づ暄寒の禮を叙し是れより談話は今昔に渉り四方山に移れり女史性快活而も疎漫に流れず談周密而も饒舌の嫌ひなし予は今少しく女史の風采を讀者に紹介せんか然れども予は文學者にあらず其微を描き纎を穿ち女史をして紙上に活躍せしむるの筆を有せず寧んぞ讀者をして女史と紙上に面晤せしむるの思ひあらしめんと云は

んや。

聞く女史は年齢五十又六を加ふとされども女史の肉は肥へたり肉色は澤々たり額上未だ一波の皺を生せず鬢邊亦一莖の白を留めず加ふるに擧止言語快にして活之れを以て一見すれば女史の齢は其齢より十五乃至二十以下に在るもの丶如し顔は長面にして鼻筋は通り口元は締れり額の狹きは其辛福の少なきを示し眼の威容あるは其の年少より武道に折肱せるを證せり此日女史は髷をコトヂ結びとやらん云ふに束ね白地の浴衣を穿ち黒繻子の幅狹き帶を締て極めて淡泊なる装ひを爲し居たり。

女史の談話は凡そ一時間餘に渉り自から語り又問に應へぬ此間其半生の略歴史を語り勤王諸士轗軻不遇の實歴史を話し更に轉じて門弟子（武道の）の零話を試むる等千種萬端一々之を記すべくもあらずと雖も今其二三を摘録すれば女史は劍道師範として名高き千葉家に生れ維新の交其齢未だ成人に至らず夙に武術を以て諸侯の邸に出入して子弟を教授せり女史既に家の嫡嗣にあらず之れを以て嚴君女史の出で丶他に適歸するか否らずんば別家して所天を迎へんことを勸めて止まず然ども時方に天下紛亂四方英傑の士劍を把つて起ち東遊西説事あれば則ち其頸血を將つて社稷に濺がんとす女史亦た私かに巾幗渺々の身を以て國に盡すあらんことを期せり其の所天を求め家を營む如きは決して其志にあらざりしなり是を以て嚴君の百説千諭勿論其腑に落つべくもあらざりし嚴君遂ひに女史を目して汝は狂人なりと絶叫するに至る。

此時其の未來の所天なりし阪本龍馬氏亦た劍を千葉家に學び熟く女史の人と爲りを觀破したりけん女史の嚴君に就て伉儷を求む嚴君乃ち阪本氏に謂ふて曰く我女は狂人のみ盖し卿の熟知する所卿若し夫の狂人を娶るに意あらば我爲んぞ之を拒まんと因りて女史に其意を通ず女史強る能はずして嚴君の命に從ひ且つ天下靜定の後を待つて華燭の典を擧げんと請ふ嚴君之を許し阪本氏亦之れを諾す時に女史年廿一二是れに於て女史の家より聘禮として短刀一口を阪本氏に贈る阪本氏は云ふ余に一物の聘禮に充つべきなし止むなくんば春嶽公より拜領して既に着古びたる袷衣（桔梗の紋付けたるもの）一領を以て聘禮に代へんかと乃ち之れを千葉家に贈る爾後阪本氏は京師に九州に東奔西走し而して女史亦朝北暮南嘗つて定所なく

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女史齢三十二三の頃阪本氏は即ち京師に横死し夫妻終生花晨月夕の歎を共にするの期なかりしなり悲むべきかな。

此他女史の話は一にし足らず曰く妾の當時勤王諸士に交はるや諸士に告げて曰く君等若し死せば妾は四時君等の英魂を吊ふに怠らざるべし請ふ先づ其手蹟を遺し置け妾は之れを靈迹として吊祭せん聞く人魂は不滅なりと然らば若し死すとも夢裡にも必ず獨來現せよと以て同士の士を勵ませり曰く門弟を取ること寡なしとせず而も其の奥儀に達せるは稀なり就中女史に於て然りとなす然れども豫州伊達侯の姫君政子と云へるは妙齢にして武道を修し妾に就ても、薙刀、擊劍、居合、及び馬術等を修めたるが資性活達にし武道に堪能なること男子中に於ても匹に見る所妾許すに免許皆傳を以てしたり元來伊達家の老侯並に若君共に儉勤にして武道を勵み玉へること迥然として他の長袖者流と異なれるが故政子姫の能く斯くの如くなりしは其天禀の質に依るならんと雖も抑も亦た家庭の敎養普通深閨の貴女に異なるものあるに依らずんばあらざるべし曰く門弟中金春の歌妓君子なる者あり日々道場に來りて薙刀を學び其伎頗る上達せり以爲く妓流にして武道に志す如斯きは當世に稀れなりと後此歌妓の會藩某氏が落胤なることを聞き其の武士の氣魄の遺傳せるものあるを思ひて坐ろに感に耐へざりし此歌妓後日京紳某に落籍せられて今は其の婦人となりて琴瑟相和せり曰く之れに反して最も可笑話しあり其は踊の師匠にて中村源之助と云ふ者來りて入門したることありしが此者は如何程敎ゆるも擊劍の時踊りの身振を爲して遂に之れを矯むる能はざりしと女史は此の一齣の談話を爲すに當り抱腹して絶倒せり予等亦覺へず哄笑。

辭し歸るの時時器正に十一點乃ち歸途温泉に浴して歸社し匆々之れを記し了んぬ讀者余の文字の趣味なきを以つて女史の談實に這般砂を嚙む如きものにてありしならんと思ふ勿れ女史の談は津々として味ありしなり。

思ふこと心にかなふ身なりせば、
秋の別れを深く知らまし。

理學

燐火（二）　けい子

其夜は、三日月の影の未だ消殘れるに、秋の野の哀れを跡に殘して、二人は我家へ歸りたりしが、其翌日、靜子は敏子の許へ、人して書狀を送り越しぬ、敏子は是を開き見るに、其文に曰く

昨夕はゆくりなくも野邊の漫步きに秋の哀れも身に染みていと面白くぞんじ申候其歸路のお話しは又殊更に面白く今迄疑はしくぞんじ候ふしも秋の霜の朝陽に逢ひたらむやうに名殘りなく解果て三日月のやさしげなる光も千草の哀れなる色もなか／＼に代へがたく千金にも勝して嬉しくぞんじ申候朧を得て蜀を望むとやらは現に能くも申侍りし、手前昨夜臥房に入候てよりもいろ／＼宵の御話しのことゝも繰返し打案じ候處其折一つの伺ひ洩らし候ひしは燐火性物の効用の事に候螢は昔燈火の代りに用ゐ候人もあるよしかね／＼父の教訓の端に申聞かせ候得ば此虫の効用は誠と尊くやさしきものにぞんし候得共其外のものは如何なる効用かおはし候にや序でにお示しを被賜候はゞ難有ぞんじ申候お話しの餘りに面白く候ひしより又今更に是迄もお強請申上候事に御座候可祝

月　日　　しづ子

とし子樣

とし子は、直に返事認めて送りしが其文は左の如し

御文難有拜し申候命の如く昨夜は野邊の漫步きに學びの窓の憂さを晴らし申候御尋ねの趣御答と申すも何とやらん鳴呼がましくは候へども私是迄師に就て承り候事だけを左にかいしるし御返事に代へ申候

一金剛石　金剛石の尊くうるはしきは今更申さずもの事に候得共中にも此石の取分けて尊きは昨夜もお話しいたし候夜間に光を放つことに候去れば貴婦人の指輪襟飾などに用ゐ候へば夜會の折などにもいと麗はしく輝き出で薄き手袋などにては其光の包みかたく候ところ此玉の殊とに貴重なる點かとぞんし申候又た此石は玻璃を切る程のものに候へば是れを磨くには金剛砂の外に無之一の寶玉を得候には多

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

くの金剛砂を費やし候へば此石の磨けると未だしきとは其價に餘程の相違有之由に御座候是等も亦金剛石の諸金石中にて最も堅しと申す證據の一つにや候はん。

一○硫化カルシユム　硫化カルシユムの光を利用して暗夜にも時間の知れる時計を製造いたし候はたしか亞米利加が最初かと存申候其法は時計の時間を現はせる羅馬數字を黄色にし其中に硫化カルシユムを交へ地は一面に黒色にいたし候て夜分の時を知ることに候斯くいたし候へば字の分だけは暗夜にも輝やき候へば夜行などには便利第一とぞんぜられ候我國にては之を票札に用ゐかけ候人も有之よし只今は瀬戸もの丶票札など殊の外流行に候へば其字の夜分にも輝き候やういたし候はゞ燈火の力も假らで人の家も探され可申第一郵便電信の配達夫などは大きに相仕合候事とぞんじ申候然るに此もの丶其程甘く參らぬと申す仔細は晝間日光に晒らさねば夜間の光隨つて薄きものに候へば票札も目論見候人のあるのみにて未だ行はれ候噂さは聞き不申是も只今の模樣にては評判だけにて濟しことゝ存ぜられ候

一○燐　燐は千六百六十九年ハムブルグの學士ブランデツト氏の發明せるものにて其製法は普通の化學書にも見え候通り動物の骨を燒き稀硫酸を以て其灰を溶解し之を煮詰めて砂利狀とし更に炭粉を混じて軟塊を作り此塊の乾燥するを俟つて鐵製の彎形器に入れ爐中に於て強熱いたし候へば黄色の蒸氣となりて現はれ申候此蒸氣を冷し候へば黄色半透明の固躰となる是即ち黄燐に御座候ブランデツト氏が最初此燐を發明いたし候頃は世人皆其冷光の奇異なるに駭きさま〲に持囃し候ひしより其價甚だ貴く某國の王は此を冠の飾にいたし候よし夜間冠の輝き渡り候は成程帝王としては尊くも嚴めしくも拜まれ可申候へども今より考へ候へば隨分不思議なることにては候はずや去れど燐は空中の酸素と化合し漸々酸化して發光性を失ひ候のみならず之を取扱ふ際の危險も亦少なからず候間斯る流行は程なく已みて復行はれず成行き候ひき黄燐を日光に觸れしむることなく眞空中に於て攝氏の二百四十度に熱する時は漸々變色して赤褐となる之を赤燐と申し候元來摺附木を製造いたし候には細末の赤燐を含有する可燃藥を細き木片の一端に着け之を粗糙なるもの丶面に摩するやういたしありしか

ども斯くては墜落顛覆打撃等の爲めに屢々發火し遠路運搬の便を欠ぎ申候殊に海外に輸出候折柄は船中にて發火いたし幸ひ船火事などの大事に至らず候も附木の分は殘らず燒失先方へは只灰許りを送り屆くるなどの奇談も有之候然るに安全摺附木の發明ありて全く此危險を免かれ候やう相成申候安全摺附木は只今我國にても一般に用ゐ候ものにて即ち細長き木片の一端に鹽素酸ポッタシユム一名鹽酸加里、樹脂、硫黄等の燃易きものを付け之を赤燐の細末を付けたる箱の一側にて摩擦するやう製造いたしたるものに候彼五色を備へたるマッチ、臘マッチなどは前の木片の端に赤燐を和したるものに候へば暗所にて少しく摩擦などいたし候へば著しく燐光を發し申候是にて壁などに鬼面などを畵き候へば其鬼面燐光を發し小兒などは顏をそむけ可申候只安全マッチは斯ること無之候へば遠路の運搬にも差支不申是其名の因て來るところとぞんじ申し候　（未完）。

家政

家內重寶錄

○あんころもち

私かたにて春の末頃にあんころもちを拵らへ升た處、餘り暑き頃ならぬに、一夜明けて悉く腐敗いたし升た、何故に左樣なりしか、如何にして腐敗を防がる可きか御教へを承り度し

不習れの方が度々なさる失策と思ひ升。それは多分餅を搗いて溫和のある中に餡をお入れなさつたからのことと思升。

此次餡入の餅類をお拵らへの時は出來た餅を三十分ほど冷水に浸し置きて後、同じく冷へた餡をおいれなさるが宜しうム升。

○臭のつひた玉子

私かたにて鷄の生し新ら敷玉子を味わひ候處、何故か、古くさき妙な臭致しまして、不審に堪へず候、枯葉の中の虫類を啄ませ候が、其原因に候はんか、さもなくば、台處の殘物を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

何くれとなく投げ與へ候故かとも考へ候、如何？

御承知の通り鷄を飼ひ候には何より清潔法を守らねばならぬことに御座候、増して玉子は兎角臭のつき易きものに候へば、御推察の通り腐敗物を拾ろひ候が臭味の原因かと存候、魚の腐敗したるなどを食はせて、生みし玉子に臭のつきし例しも候へば、清潔法に御注意なさるが何よりと考へ候

○飼鳥の禿

手前かたにて手飼にいたし候鸚鵡并にカナリヤとも誠に丈夫に且つ元氣よく御座候へども、鸚鵡は胸の邊、カナリヤは頭の上、双方とも少しづゝ毛薄く相成、全く禿たる處も有之、甚だ醜し、秘藏の鳥とて心配に御座候。右療治の法方も御座候はゞ御示しを乞ふ

鳥の毛を薄くいたし候は大抵食物滋養に過候より起りたことに御座候。肉類、胡桃類、菓子類など過ごさせ候ては宜しからず、カナリヤには稗の外に青物を充分に御與へ被成が宜しく。烏賊の甲を粉にして鳥籠の中へ蒔き玉ふも爲にならんかと考へ候。この外水浴いたし候入物の中へ重炭酸ソーダ少し計りとリスリン少し計り加へて御試み被成度候

○フランチル洗濯法、

フランチルは上着にいたし候ても、下着にいたし候ても甚だ重寶な品に御座候が、洗濯法のあしき爲か、何分縮みて誠に困り候、何卒洗濯法御致示あり度願上候

仕立つる前に水に入れ、充分縮まし候上は如何にも洗濯法のよしあしにて永く重寶にも相成、また全く無益のものにも相成候事に御座候。左に手短に洗濯の要領申上候。藥屋に硼砂と申ものあり、シヤボンやソーダの代りにこれを微温湯にて解かし、洗濯ソウダを用ゐると同樣なる鹽梅にこれを用ゐ試み玉ふべし。たゞ手に揉むと、余り固く搾るとを忌み候。ボウシヤの解かしたるものへ入れ、暫らく手にて推しつけ、余り汚れたる處はシヤボンをつけて輕くもみあとは好い加減にして水あけ、汲置の水かぬるま湯にてそゝぎ出し、なる可く早く干してカラリとさせるがよろしく候、木綿などを洗ひ候樣に長く熱湯に浸し置候へば、全く縮みて用を爲さぬ事有之候。生干の時手にて少しく伸し候も差支御座なく候。

女報

淡海子編

●暑中活花を廢せらる　皇后陛下御座の間には從來活花を以て裝飾の一に加へられし處暑中は水の腐敗する恐れありとて今般之に代ゆるに造花を代てするとなり、共立女子職業學校へ御注文ありし由承はりぬ、

●華族女學校規則の改正　土方宮內大臣は華族女學校規則を改正し、宮內省達乙第四號を以て去廿三日公布したり、其要領を摘記せば同校は　皇后陛下の令旨に依り華族のために建てられたる女學校にして、宮內省の所轄たり、敎育の趣旨は彝倫を本とし智識を發達せしめ、高尙の性情を養ひ身體を强壯ならしめ、上流の賢母良妻たるべき者を陶冶するに在り、生徒は華族の女子にして品行正しく體質修學に堪へ得べき、六年以上十八年以下の者に限れども、都合に依り士族平民の女子にも入學を許さるべし、尤も敎科は小學科と中學科を各初等と高等に分ち、每等科を更に三學級とし、每學級を三學期に分たる其生徒心得なるものは、

本校の生徒たる者は常に　皇后陛下の令旨を服膺して心を正しくし行を勵まし溫良貞淑の女德を養成せんことを勸むべし。平素禮讓を厚うし信義を重んじ又堅く學校の規則及ひ敎諭を守るべし。常に飮食を節し運動を適宜にし氣力を爽快にして身體を壯健にせんことを勉むべし。衣服は質素にして身體に適するを旨とし外觀の美を競ひて浮華に流るべからず、

●日本の佳人手工シカゴ人好望　米國シカゴ府の起立工商會社役員、ターベルといへる人本年四月來朝の際、神田一ッ橋外共立女子職業學校を參觀し、同校生徒の製造に係れる造花を一覽して其巧妙なるを嘆賞し、直ちに丈五尺餘の櫻、梅及山吹の諸花を注文し、喜びて之を本國に持歸り之を朋友に誇り示したるに、皆な痛く其の婥姸眞に迫るの美を感賞せしかば忽ち大評判となり、互に競ふて之を讓受けたしと望むもの出で、僅か七圓餘の元價のもの遂に一朶の櫻花價二十五弗の高きに騰りしかば、氏は終に愛を割きて賣却し更らに再び其の造花を得たしとて、シカゴ府在留の手島精一氏に其注文方を依賴したりといふ、

●赤門のラシヤメンの追放　赤門校內には三種の建物あり、第一は學校、第二は病院、第三は敎師舘即ちラシヤメン舘是れなり、廣漠たる敷地內に此三種の建物が散在する所より、ラシヤメンの逍遥、コックの徘徊學生の運動看病婦の徘徊見舞人の出入、等恰かも內地雜居以後の有樣を見るが如き感あり、中にも赤髯とラシヤメンとの兩々相携へて步める抔は實に淫猥見るに耐へず、之れが爲め學生の風紀にも少からざる妨害ありとて、濱尾總長は今度外國敎師の寓所を構內に置きたる其舊制を改め、ラシヤメンと共に之れを構外に追放する決心にて、右と同時に構內を兩分して其境界に墻を築き、一方を病院構內として、一方を學校構內とすべしと云へり、

●田中敬一氏　先に宮城縣尋常師範學校長たりし高等女學校敎授、田中敬一氏は去る八日北海道に赴き、目下同道渡島國龜出郡七飯村なる講習會に出席し講師を務め居らるゝ由、

●沖繩の結婚奇談　沖繩縣に於ける結婚の習慣なりと云ふを聞くに、花嫁は晴れの打扮に大なる杵を持ち練出せば、若者其杵に繩を付け其の端を持ちて馬の眞似をなさしめ近村を押廻し、軈て良人の家に入るなり、夫れより三々九度の式終れば、花聟は媒介人と共に妓樓に登りて大愉快を爲し、翌朝花嫁種々手製の料理を携へて妓樓に至り、良人及び娼妓を上客として充分馳走を爲すよし、之は女子嫁入を再びすべからずとの意より、婚禮に大耻かゝせ又嫉妬心なきを示すため、良人を妓樓に饗應する次第なりと、

●關西女子高等學校　東區道脩町二丁目の大阪婦人學習會は、今回其規模を擴張し規則を改正して、關西女子高等學校と改めたり、

●男裝女子仕込杖を携ふ　岡山縣北久米郡の人田淵こふ（二十年）は先頃出京し、一時本所綠町某敎會所に寄寓し、其後芝區內に居しが所持の衣類其他を賣却し盲縞の股引腹掛を買ひ髮は散髮となし、男子の姿に粧ひて田淵孝と名乘り、此程橫濱港町二丁目奉公人口入業なる、身元保證合資會社に來りて商館又は西洋料理店等の住込みを依賴したるが、其正体顯はれ說諭の上歸國せしめたりしが、此女始終仕込杖を携へ居るより、流石の周旋屋も一層薄氣味惡く思居たりと、

●孝貞　德島縣那賀郡平島村大字中島浦六十番屋敷平民、堺濱吉妻クマ（四十六）は去る十二日村上仝縣知事より左の如く賞賜せられたり、誠に得難き婦女の龜鑑と云ふべし

那賀郡平島村濱吉妻　堺　クマ

天質溫良能く父母に事へ孝養怠らず殊に慶應二年父を喪ひ加ふるに兄官吉は平素家事を顧みず一家益貧困に陷るも夙夜勤勉家計を經理し明治二十五年始めて夫を迎へ爾來亦能く孝貞の道を盡し志操の渝らざる三十有年一日の如く洵に奇特とす依て爲其賞金六圓下賜候事

明治二十六年八月十二日　德島知事正五位勳六等　村上義雄

●桑港公立學校日本人入校に關する新議案　桑港公立學校日本人入校拒絕事件に就ては、從來度々報道する所ありしが、其後桑港學務局長バーク氏の友人アッカル氏、一の議案を提出して已に昨月十二日同學務局の會議に附せられたり、議案が果して學務局の會議を通過するや否やは未だ之を知るに由なきも、今暫く其を左に譯出す

桑港市の公立學校に在る日本人は、學務局は桑港市に於ける永久の住民として取扱はざるべし、日本人の書生にしし桑港市公立の學校に入んと欲するものは、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

必ず市の教育費に向て五ヶ月分の授業料を前納せざるべからず、而して其授業料は中學校及び商業學校は二十弗にして小學校は十弗なるべし云々　（毎日）

●下田歌子女史は華族女學校教授に任命ありたり。

●墺地利の皇后　が微行し給ふ時には、御名を或はデートフナ夫人、或はニッコルソン夫人、又はシンプソン令孃と稱し、斯樣の時にはこれ、さう云ふ時には夫れと、右の三種類の御替名の間に區別も付け給はず、總べて其時の御心持ち次第にし給ふとぞ、

●世界第一の歌姫　パッチーは、彼のオートグラフ、アルバムとて西洋諸國に流行する所の友人、又は有名なる人々へ乞ふて自筆の姓名を書入れしむる所の白紙の手帳を携へ、來る人々に隨分己の姓名を書て取らすこともあれど、唯その紙の頂上にのみ之を記すとかや、扨その謂れは如何にと聞けば面白や、西洋諸國にては自筆の姓名をサインと云ふて、我國の調印に等しき効力あり、其處で或る時パッチーが例の手帳の紙の中程に記名したることありけるに、其後間もなく右の記名の上に「余は之を見ると共に一千磅の金額を支拂ふことを約束す」と云へる商賣上の文句を書加えられたり、以來パッチーも悟る所ありて扨こそ紙の頂上にのみ姓名を記すことゝはしたるなりとぞ、

●一年五千弗　西班牙の皇女方に御守役の婦人三人あり、即ち西班牙の禮儀を教え參らするはデヌラソール伯爵夫人、英吉利の作法を受持つはエッターヒューヤス令孃、墺地利の式法を心得るはポーラ夫人にして右の三名は各々年給五千弗、居宅は王家より給し給ふと云ふ

●婦人の演說、英國下院に於て演說したる古來第一の婦人は、イザベラー、ボエルド、ビショップ夫人とて廣く世界に旅行し、多くの旅の記を著して世界に名高き人なるが、同夫人は土耳其領クールザスタンに居る耶蘇教信者に就て見たる所を語り聞かする樣にとて、英國下院へ招かれたるなりとぞ、

●男裝の婦人　女權擴張の旗頭　デザアルセール夫人が、世にも名高きラカデミーフロンセーズ（佛國學林）會員の候補に打て出でたる勢を見て、全巴里は大悅び面白い所作が始まッたと笑ひ囃せり、デザアル　セール夫人は何思ひけん、出入りの仕立屋に男の衣服を誂へ頻に右學林の會員等へ投票し吳れる樣にと懇願の爲め奔走し居れりとぞ、佛國學林の會員に當撰すると男の衣服を着るとは其間に如何なる聯絡のあるものにや　（以上四件時事新報）

●小學貯金談　一、郵便貯金　香川縣多度郡吉田村及び多度津町の兩小學校にては、先般來貯金の法を設けて、之れを實行せしに、預け人續々增加し、其の結果甚た宜しかりしが、今又同郡の善通寺小學校にても、之れを實行せしに、直ちに三圓二十餘錢を得て、郵便貯金と爲せしと。　二、貯金の原資　靜岡縣知事は儲に貯金に關する訓令を發したるに、之れが好果を收めんには、須らく貯金の原資を求めざるべからずとて、同縣賀茂那賀郡長大野恒哉氏は、此程左の方法を以て學童に養鷄の事を訓令せしといふ、又其法と稱すべし。

小學生徒に、雄鷄一羽、雌鷄二羽を私有せしめ、毎日出校前、退校後に於いて飼養をなさしむる事。小學生徒は、養鷄の產出する卵類を自ら保存し、十個以上に至る時、之れを父母又は學校教師に依托して賣却し、其の代價を以て貯金に充つる事。小學校教師は各生徒より鷄卵を差出したる時は、之れを取り纏め期日を定めて競賣に付する事。小學校教師は、休業日又は授業時間外に於いて生徒養鷄の實情を適宜視察する事。小學校は善良なる種鷄（採卵種）數羽を飼養し置き、一は生徒に飼育方法を授け、一は卵顆若くは雛鷄を生徒に分ち、種類改良の資料に供する事。

●千葉縣下蠶茶概況　千葉縣下に於ける、本年繭及製茶の概況を各郡に就きて調査せしに、蠶種掃立枚數二万五千四百九十四枚、收繭高一万九千四百二十八石、蠶種一枚に對する、收繭高七斗六升二合にして、前年に比すれば掃立枚數に於て一割一分三厘、收繭高に於て三割一分一厘、一枚に對する收繭高に於て二割三分三厘の增なり、又製茶產額は七万三千百四十一貫目にして、前年に比し一割八分の減額なり　（官報）

●海江田翁薙刀の道場を開く　樞密顧問官海江田信義氏は、婦女子をして尙武の念を奮起せしめんが爲め、薙刀術を女子體操科の一に編入し、之を修練せしめんとの目的を以て中澁谷の自邸內へ旣に道場を設け、之が支部を牛込市谷砂土原町三丁目に開き、小山某氏をして之が監督及教授をなさしむるよし、

●栃木縣尋常師範學校附屬幼稚園幼兒は三十九人にして、內男廿二人、女十七人なりと、

●全國娼妓の數　最近の統計集誌によれば、全國娼妓の數は、明治十七年度は二万三千三百五十八人、同十八年は二万〇七百三十八人、同十九年は二万千四百六十二人、同廿年度は二万四千九百九十九人、同廿一年は三万二千四百六十三人、同廿二年は二万九千六百九十七人、同廿三年は三万千〇九十一人、同廿四年は三万〇五百三人なり、

●幸田左衛門の母　織田信孝の家臣幸田彥左衛門、主と共に岐阜城を守る、豐臣秀吉、兵數萬を率ひて之れを圍む、信孝勢窮り、力盡きて、其の母、及び彥左衛門の母を質として和を結ぶ、旣にして信孝また兵を擧ぐ、秀吉怒つてその質を殺さんとす、而して又幸田の剛勇を愛し、母に依つて之れを誘はんとす、幸田以謂らく、降らんか、君に忠ならず、守らんか、母に孝ならず、進退維に谷り、またなす所を知らず、母之れを聞き、書を遣はしてその心を勵ます、曰く、汝節義を守りて、よく汝の君に事へよ、忘れても親の故を以て二心を懷くべからず、即ち此の如くんば、君に忠あり、母に孝あり、これ兩全の道といふべしと、是に於いて意を決して降らず秀吉益々怒りて、遂に其の母を殺す、幸田もまた主信孝と共に格鬪奮戰して討死せりとぞ。　（新教育）

●東京府下居留外國人數　本年六月三十日現在東京府下居留外國人の數は總計七

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

百二十九人、内男四百八十三人、女二百四十六人にして、開市場内に住居する者二百四十六人、内白耳義國人男二人女二人、清國人男六十二人女一人、佛國人男六人女五人、獨國人男六人女三人、英國人男二十六人女二十三人、瑞西國人男三人女一人、米國人男十五人女五十四人、無籍外國人男一人女一人、又開市場外に住居する者四百八十三人内白耳義人男一人、澳國人男二人、清國人男二十一人女七人、朝鮮國人男七人、佛國人男五十六人女十一人、獨國人男四十九人女十三人英國人男九十四人女六十一人、布哇國人男四人女一人、蘭國人男七人女七人、伊國人男六人、葡國人男四人、露國人男六人女二人、瑞西國人男五人、丁抹國人男一人、米國人男六十四人女五十四人なり但し一時客舍に止宿する者は玆に算入せす、　（八月廿三日官報）

●椿視學官の轉任　文部視學官兼女子高等師範學校教授椿秦一郎氏は、今度華族女學校幹事に任ぜられたり、又視學官の後任は改正官制に依て補任を爲さゞる由なり、

●貴女の理學博士　近頃英國倫敦に於て貴女の理學博士の學位を得たるものあり、即ち此貴女は在アバーヂン、ゴールドン専門學校の博士オギルヴー氏の娘なるマリヤ、エム、オギルヴー孃にして、孃が其理學博士の學位を得るに就ては、倫敦大學に於ては其最終の評議をなしたるに、皆頗る孃を信用して遂に其博士の號を贈ることゝなりたり、孃は又々其の幼年に在エヂンバーグ貴女専門學校より金牌其他の賞與を受取りたることありと云ふ、孃は亦た熟練なる音樂家にして初め帝室音樂學校校長博士マッケンジー氏及びサー、ジョルジ、マックファレン等の薫陶を受けたるものなり、後ち孃は在エヂンバーク、ヘリオツト、ワツト専門學校に入り、理學を研究し遂に爾來専心此學を研究せんと決定するに至れり、斯くて後孃は倫敦大學に移り此處にて一千八百九十年遂に理學士の學位を得たり、孃は後ち更らに日耳曼に往き博士ズッテル氏の下に勉學、且つ或る地方に關して其地理上の測量をなせり、此の測量の結果は倫敦に於ける或る地理學會の雜誌に掲載せられ、倫敦に於ては孃が今回理學博士の學位を得るに就ての卒業論文として、此測量の結果を承認せり云々と或る英字新聞に見ゆ　（毎日）

●函館の婦女職業學校　此頃本多正雄といふ人見出の如き學校を設立せんとせしに大方の贊助を得たれば不日着手する由、而して教科は裁縫編物刺繡造化圖畵等なりといふ、

●東北女子實業科傳習所　仙台市大佛前なる同所にては從來教授し來りたる諸學科の外になほ割烹、茶の湯、押繪等を增し益々校務を擴張するに付き此際入學女生徒の便利をはかり授業料をも改正して本科、高等科を六十錢、各科一科目を三十錢同二科兼修を四十錢とし寄宿費用を三圓と定め併せて規則をも改正したりと聞く

●女子師範學校々長更迭の噂　「文部省直轄學校の校長は奏任とす但し高等師範學校長及女子高等師範學校長は特に勅任と爲すことあるべし」との舊令に依り女子師範學校の現任校長細川潤次郎氏は勅任に叙せられ居るが今回の官制改正にて校長は凡て奏任と爲すことゝなりしより細川氏は他に轉せらるべく其後任には先頃高等師範學校の附屬校となりし音樂學校の校長たりし村岡範爲馳氏なるべしとの噂を聞く、

通信

淡海子編

●千島通信

◎高橋傳五郎氏　此程社員の元に達したる通信によれば、同氏は去る六月郡司大尉千島拓植の擧を贊し、振て大尉の一行と加はり、其後千島國擇捉紗那村報効義會に在留せられけるが、去る七月廿日郡司大尉の一行拾四名と共に、帆走船泰洋丸に乘込占守島に赴きたりと云ふ。又メソチスト教會傳道師中田重次氏は擇捉紗那に在任せざる、

●高知縣通信

木公子

◎高知佛教婦人會　同會は去十三日高知市本町本願寺に於て竹中茂麿氏等を聘し演説を開れたり、

◎恩給證下付　千島艦沈沒の際溺死せられし故海軍一等水兵友村穀成氏の母友村みち子、此度扶助料として年額金三十八圓の恩給證を下付せられたる由、

◎土佐音樂會　本月十六日同會第二回演奏會を開き、君が代、白蓮、見渡せは、露の玉、矢玉の霰、才女、蝶々、日本の歴史、海國、御國の櫻、空蟬、五常の歌、福島中佐歡迎、其他白蓮、白菊、小野道風、皇統無窮、元寇、等の奏樂ありたり、此日會する者男女數十名茶菓の饗應あり頗る賑やかなりしと、

◎幼年囚徒　當高知監獄に幼年にして竊盜及詐欺取財犯を以て入監する者近來增加し現に十六年以下の幼年囚二十三名其身元に付て調査すれは概れ平民にして幼少より實父母なく或は父あれは母なく家庭教育を受けさる者多く右二十三名の内實父母を有する者とては僅かに三名なりと

◎小松安子　高等師範學校卒業生なる同子は此度高知市第一高等小學校教員を命せられたり、

●西京通信

◎高等女學校は本年度は篤志家の寄附金によりたれど、廿七年度より地方税經濟に屬せしめん見込なるが、授業科の收入少なからざるを以て、地方税より二千圓を支出するとなれば容易に繼續し得るを以て相談中なる由、

◎紀伊郡教育會は本月一日より小學校夏期休暇中、即三周間第三高等中學校教授文學士、服部宇之吉氏師範學校教諭、戸野周二郎氏、靑木某氏を聘し心理教育數學の講義を開きしが、他郡よりの來會者もありて八十數名なり、中に女子十數名もありて熱心に講習せり、

◎南山城の基督教徒婦人の發起にして淀宿城内緣陰冷しき處にして親睦會を開き遠方より來會するもの多く盛大なりし、

◎京都師範學校教諭戸野周二郎君は同校教諭西里某と結婚せり、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

麹町區上二番町三十三番地

女子學院附屬小學校ニ幷ニ幼稚園

來九月十日開校各級（通學寄宿共）入學ヲ許ス

●女子の獨立（産婆獨學一ヶ月卒業）

博士カリンジウォールス氏著
貴族院議員從四位勳三等巖谷修題字
海軍々醫總監正五位勳四等加賀美光賢序文
横須賀海軍病院詰其蜩學人隱岐敬次郎譯述

月修産婆學 全一冊

正價金八拾錢
郵税金八錢

本書は一ヶ月間勉強せらるれば内務省産婆試驗に合格するは博士、學士の證する所なり啻に産婆志願生のみならず世の貴嬢、令夫人苟くも保健學の何者たるを知らんとする者は是非一本を坐右に具ふべし

發行賣捌 東京芝區櫻田備前町九番地 植村八重子

馬喰二島村、春木町仝支店、通三丸善、京都若林茂兵衛

女學生募集

豫科（二年）本科（四年）高等科（二年）各級共入學を許す有志者は九月十一日迄に御申込あれ、規則書御入用の御方は郵税御送被下度候

横濱市山手二百四十四番 英和女學校

本校九月十三日開校豫備科、普通科、高等科共各級へ入學を許すべし右志願の者は同月十日迄に申込あれ但し規則書入用の方は郵劵二錢を要す

神戸市山本通四丁目 神戸英和女學校

東京英和女學校寄宿生及通學生募集

一本校は廣く日本女子の爲に基督敎主義に基き高等なる自由敎育を授く
一普通學部は修業年限を四年と爲し本科別科の二科に分つ
一豫備學部は修業年限を二年となす
一職業部は修業年限を三年となす
一敎員は内國人十一名外國人四名
一寄宿舍には内國婦人二名の監督を置く
一校醫は定時來診して衞生上の注意を與ふ
一入學試驗九月十一日午前九時
一始業九月十二日
一規則書入用の諸君は郵税二錢を送られたし

明治廿六年八月 東京青山南町 東京英和女學校

四版

皇后陛下御覽 三島通良君著

はゝのつとめ

和本上製（上下二冊揃）定價金五拾錢郵税金六錢

醫科大學産科●婦人科●小兒科○華族女學校●長崎●福岡●島根●秋田其他數縣尋常師範學校教科書及參考書

右は第三版賣切の所今般第四版、印刷成りたれは一層直段を引下候間續々御購讀あらんとを

東京麹町區下六番町六番地 女學雜誌社

華族女學校學監下田歌子先生序
同　教授關根正直先生編輯
同　教授阪　正臣先生編輯并書

筆のゆきかひ

上之巻壹册
正價金廿八錢
郵税六錢
特別上製金卅六錢
郵税六錢
下之巻近刻

本書は多年女子教育に從事せらるゝ兩先生の編輯を請ひたる所にして文躰は古雅に過ぎず卑俗に陷らず優美にして實用を兼ねたる女子消息文の摸範たり且旁ら習字の手本とも成るべき便を計り阪先生の揮毫せられたるものにて姿致瀟洒として婉麗に製本又頗る美にして上品なり

發行所
東京市日本橋區通り一丁目
（電話四百四拾番）
大倉書店

賣捌　東京中西屋○大阪前川●神戸熊谷○靜岡廣瀬●名古屋河瀬○千葉多田屋●横濱丸善○岐阜郁文堂

至急廣告

唯一日刊　**大日本教育新聞**

定價一ヶ月二十五錢小學校及び同教員學生識君へは三割引（前金）郵税十二錢五厘

我社は本月十五日より、夫の南洋探驗者として、江湖に其名喧しき、鈴木經勳氏の纂著に係る、南洋風物誌（一百頁以上）を附録となし、週間十二頁を印刷し、月極め愛讀諸君に配劃しつゝあり、蓋し本紙は怪談綺語或は珍禽奇獸、編中に滿ち一讀快呼絶叫、實に人をして驚異噴飯せしむる、古今絶無の一大珍書なり、新紙購讀御望みの向は、至急御申込あれ、廣告の誇大ならざる、既讀の看客之れを保し、我社の欺かざる紙名之を證せり矣、

明治廿六年九月
東京市神田區錦町三丁目八番地
大日本教育新聞社

女學生募集

來九月十一日開校今回學科に改正を加へ女子適切の教育を爲んとす入學を望む者は規則書を呈す

東京市芝區三田功運町
私立**普連土女學校**

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

隔週評論發行

第拾壹號要目
八月廿六日發兌

條約改正論　善治
四人の我　ストウカル
文界時弊　撫象
富士登山記　山月

國民之友夏期附錄⊙神も佛も無き世の中⊙田村直臣氏の日本の花嫁⊙憂國餘話旅の苞⊙社會問題の研究に用ふる書籍一覽表(文しらべ)⊙中古法令廢頹の原因(布川靜淵)

にほはぬ花　花圃
經濟倫理　ゴッセン
文學上神の觀念
宗教家文學論通弊　善治

本誌代價　一冊金六錢　郵税金五厘
六冊　前金三十五錢　府外三十八錢
十三冊(半年)同　七十三錢　同　七十八錢
廿六冊(一年)同　一圓三十錢　同　一圓四十三錢

發行所　東京麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

女學生募集

本邦ノ事情ニ通曉セル神學博士モール氏今回本校ニ從事シ且ツ内部ノ改良ヲ計リ生徒ノ入學ヲ許ス志望者ハ履歷書相添九月二日迄ニ申込アルヘシ
但シ規則書望ノ者ハ二錢郵劵送附アルヘシ

明治廿六年九月　仙臺市東三番町　宮城女學校

○貴孃紳士必需の香料　廣告

大瓶　六十五錢
小瓶　三十五錢

○人造麝香は佛國理學博士が化學的の作用を以て製造せし一大新發明品なり
○人造麝香は從來の麝香に比し數倍久敷を保つのみならず實に非凡の香氣を有す
○人造麝香は純白清淨の粉末なるを以て衣類等へ擦り込みおけば一種云ふべからざる幽香を放ち大に神身の清浩を覺えしむ但し色つき又は汚穢するの患ひなし
○人造麝香は歐米各國の貴婦人紳士社會に於て隆んにこれを賞用せり
○人造麝香は瓶入にして其上木筒に入れ携帶保存等に最も安全なる装飾となせり弊店發賣は上圖の如し

(僞物注意)
近頃弊店人造麝香の装飾を摸擬し發賣する者あれども右は品質雲泥の相違あれば御求の節登錄商標及(星野)の名義篤と御認を乞ふ

日本特約發賣元　藥種問屋　東京日本橋區伊勢町十七番地　星野與兵衛

○市内各藥店幷に全國有名なる藥店にて賣捌候●取次御望の方は御申込あれ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌（第三百五十二號）（明治廿五年三月十五日遞信省認可）明治廿六年九月二日發兌

女生徒募集

寄宿通學共九月十五日入學試驗同十八日始業

規則入用ノ向ハ二錢ノ郵券ヲ要ス

横濱石川山二百十二番

私立 共立女學校

廿六年九月

文學界

第八號　八月三十日發行

要目

朱門のうれひ　古藤庵

これは幽玄の捨てどころを尋ねて露を置く花の影にほそきうれひを包めるものなり

今の人はむかしの人の肩を叩いて讀むならばドラマになさいと言ふ。

そのことのはをたばね長詩およそ三十頁餘全齣を通して本號に掲げんとす。

よしやちりこぼれたる藤の花の名殘を讀んで花漬にしてはいかに〳〵

定價	東京市內	市外郵稅共
一冊	六錢	六錢五厘
六冊	三十三錢	三十六錢
十二冊	六十錢	六十六錢

本誌第八號より『遞信省認可』になりたれば地方郵税を一册五厘に改正す

文學界雜誌社

○生徒募集

本校今回新に小學科。預科。本科。高等科の各級に入學を許す志願者は九月十日までに來校あるべし

規則書御入用の向へは通知次第遞送すへし

本校は横濱の南方山手高燥の地に位し横濱全市街灣を始めとし總房の諸山及び富岳函嶺を双眸の間に聚め風景の爽快なる空氣の新鮮なる最も衛生に適し最も觀望に妙なり

本校の目的は十全なる普通學。女子に適切なる高等學。善良なる德育。中庸を得たる體育を授け全備せる有用の女子を養成するにあり

本校は毎年本科一年級以上に校費生五名を募集す

本校は基督教徒にしてその娘妹を教育せんと欲する志厚きも其資力足らざる者のために特別法を設く

横濱山手百七十八番

フエリス和英女學校

明治廿六年九月

フエリス女學校同窓會

九月十二日午前十時より會費金廿錢

長短に拘らず一たび本校に入學せし者は參同を乞ふ

同窓會發起委員敬白

明治廿六年四月廿五日內務省許可

明治廿六年九月一日印刷

明治廿六年九月二日發行

發行兼編輯者　東京市麹町區下六番町六番地　嚴本善治

印刷者　仝牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光

發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社

印刷所　仝牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍工塲（電話十九番）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY